

## 作習

著者	上田, 不泯
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6 1
ページ	9 2 - 9 3
発行年	1916-06-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6613">http://hdl.handle.net/2298/6613</a>

らくして話して歸つた。その時氣にも止めなかつた當時の様が今だにはつきり頭に残つて居る。氣の毒な事をした、彼の日記を見て再びあの頃の彼の落膽を思ひ、心から同情して何度も讀み返した。姉なる人は彼の航海中に逝つたのだつた。又考へ込みそうになつたので日記を閉ぢた。床を延べて寢る事にして強ひて床の中に入つた。ダイ／＼云ひ出したランプを消す、日の光が窓から入る、草にすだく虫の音も聞えて居る。私は我が行手の如何になるべきかを思つて寢ながらちつと月を見入つて居た。色々の事が頭の中を廻る。

母が來るので一人で田舎道や別莊の澤山ある道を通つて停車場へ行つた。

## 作 習

獨、三、上 田 不 混

### ●題 自 像

半生碌々逐歡娛。

一事無成有疎鬚。

獨慰我心豪未減。

垢顏一笑說雄圖。

### ●贈學友原田兄

功名未就歲空過。

春酒花前感自多。

投、蓋、縱、橫、題、大、字、。

贈、君、慷、慨、一、篇、歌、。

### ●春日送友

路、傍、携、酒、送、君、回、。

風、拂、落、花、撲、面、來、。

雅客不知離別恨。

悠々題賦且勸杯。

●謁横井小楠先生墓

熊城東沼山津村。

獨弔英雄熟淚沄。

欲問傷心天下事。

墓前春寂落花翻。

暮春詠草

三、二 古 賀 薄 明

——このまづしき歌ぐさを若くして逝きし畏友古野秀隆君の靈に捧ぐ——（哀墓集）

うつゝよの星のひとつははしなくもこよひみ空にかへりけるかも  
おほぞらのいづこに君はゐますらむ仰げどそらは春ぐもりして  
いまはたゞ君がかたみの歌ぐさを誦しては涙ながす日もあり  
そのうたは銀か眞珠かエメラルド面かなしくうすぐもりせり  
わかくして逝きし君はも櫻さすその日もまたで逝きし君はも  
衰へ果てゝ君その眼とぢてけり山吹の花黄なる夕ぐれに  
雨ふれば春も浅きを君が墓冷めたく雨にぬれそぼちてむ  
あはれかの葉ずるの露かうばたまの君が命のはかなかりしかな